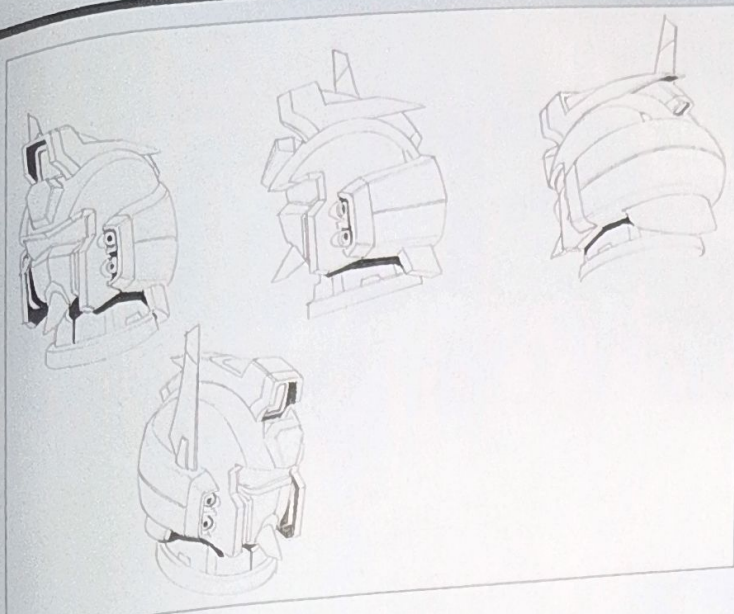
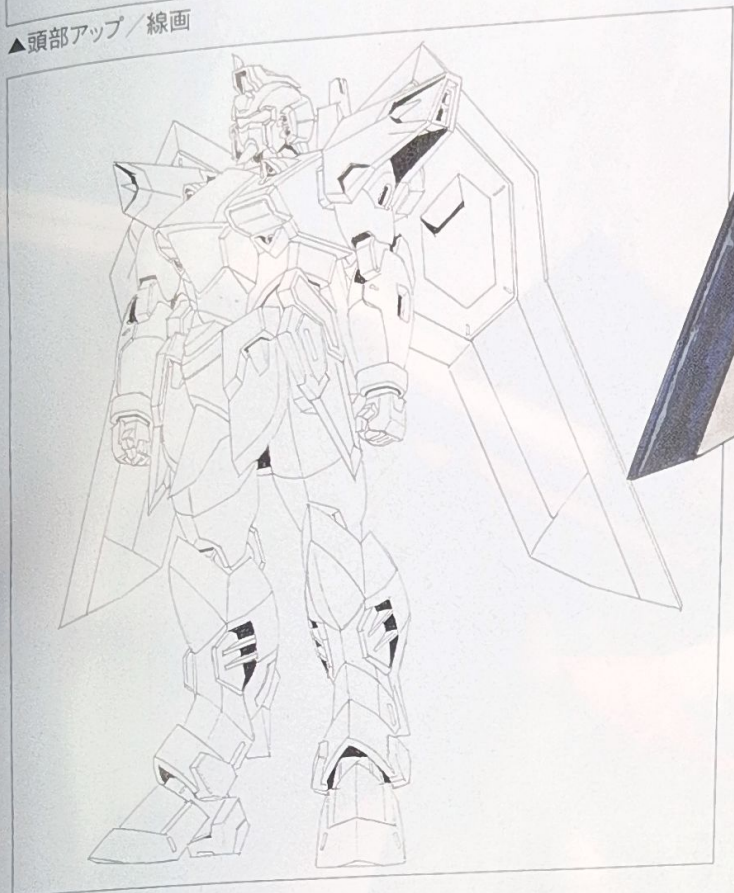




▲頭部アップ／線画



▲正面／線画



STTS-909 ライジングフリーダム CDE仕様機／STTS-808 イモータルジャスティス CDE仕様

解説／森田繁(スタジオぬえ)

STTS-909 ライジングフリーダムおよびSTTS-808 イモータルジャスティス CDE仕様機は地球・プラントが共同開催した兵器見本市CDE (Comprehensive Defense Exhibition／総合防衛装備展示会) に出展されたデモンストレーション用モビルスーツだ。CDEは、地球、プラント双方が所属する兵器・軍事装備開発企業の業界団体DIE (Defense Industry Association／防衛産業振興会) が主催する国際的兵器見本市である。出展したのはプラントのDEDO (Defense Equipment Develop Organization／防衛機材開発機構) だ。DEDOは戦後、新指導体制下で再編された組織でプラント独特の開発局制度の上位に位置する軍備統括機関である。2機のCDE仕様機はDEDOの指揮下で、ハインライン、アジモフ、クラークなど従来の設計局に新設のガンズバック、コマツ、スミス設計局を加えた協力体制で製造された。この開発スタイルはデモ機独特の特異な位置づけのため採用されたものである。モルゲンレーテ社をはじめとするオーブ企業の技術協力の可能性が指摘されるが、DEDO・オーブ双方からの公式コメントはない。

流動的な国際情勢下では同盟国が一夜にして敵国となりうる。そのため過度にハイスペックな兵器を

第三国に供与することは自国の安全保障上の脅威となる。売却した兵器が自国に牙をむかないようコントロールするため、DEDOは開発局の壁を超えたスベックコントロールを実施した。具体的な施策は重要パーツのブラックボックス化、意図的な性能低下、遠隔操作による機能遮断機構の実装などだが、詳細は不詳である。

最大の特徴であるデモンストレーション用カラーリングは一見ペイントのようだが、実はフェイズシフト理論の応用である。この機能は作戦領域の地形、植生などに適応した迷彩機能として実装されたもので、装甲表面の可視光に対する反射率を操作することで色彩変化を実現している。PS装甲としての防弾性能は先行機よりも低く設定されている。表向きはパワー消費を落とし運用時間を延伸させるための措置とされるが、実情はDEDOによる調整である。なお迷彩機能にはミラージュコロイドを使用した先行機が存在するがこの装備は運用には複雑な支援装備が必要とされ、採用されていない。頭部センサーアレイはマルチモダル性および対ノイズ性能が向上した新世代モジュールを搭載した。肩部の装甲は部材内部の積層構造を新規設計し、軽量化と応力分散性

の向上が図られている。またこれにともない組み付け方法が再設計され、損傷時の交換に要する時間が大幅に短縮されている。胸部ほか熱流動体回路を構成する熱交換ダクト類も再設計され、放熱特性の向上および熱応力による部材強度低下の軽減を実現している。

CDEでは運用環境に応じた柔軟なローカライズ性が強調された。しかし本来、高性能マルチロール機として開発されたモビルスーツをスベックコントロールすることによりローカライズするのは設計思想から逸脱している。そのため開発陣からは「これでは羊の皮をかぶった狼ではなく狼の皮をかぶった羊だ」と揶揄されたと伝えられる。なお一部では前大戦における本機の戦果はSEED (Superior Evolutionary Element Destined-factor／高次進化誘導因子または優越進化決定素因) と呼ばれる不詳の能力を持つ特定のパイロットに由来している可能性が指摘されているが、この点についてDEDOは一切コメントしていない。

なお出展時の機体名称および形式番号については技術移転先の規定に即して改変される可能性がある。